

金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺 2

— 「北溟寮寮歌」 作詞者書簡と楽譜原稿及び

「五誓寮逍遙歌」 をめぐって—

A Study on Dormitory Songs Handed Down in Hokumei Dormitory of
Kanazawa University, supplement2:
On the letter of the person who wrote lyrics of Hokumei Dormitory Song,
its musical score, and Gosei Dormitory Stroll Song

石川工業高等専門学校教授（一般教育科・国語） 團 野 光 晴

Mitsuharu DANNO

はじめに

拙稿「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察—戦後新制大学生精神史研究の試み—」（『金沢大学資料館紀要』第11号、2016年。以下「一考察」と略記）は、1986（昭和61）年から92（平成4）年まで金沢大学北溟寮に在寮していた筆者（團野）が、当時北溟寮に伝承されていた6つの寮歌について報告・考察したものである。本稿はお陰を以て北溟OB各位はじめ各方面から多くの反響をいただくこととなった。その中には新たな知見をもたらす貴重な証言もあり、これらをもとに続編「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺—「南下軍の歌」の他校伝播及び“バンカラ唱法”の出現とその意味をめぐる—」（『金沢大学国語国文』第42号、2017年。以下「補遺」と略記）を発表する運びともなった。これらの拙稿の発表が契機となって、金沢大学での講義やOB会での講演の機会を賜ることにもなった¹。「北溟寮2016卒寮祭 ほんとうにさようなら」（2016年11月5日）及び「北溟寮OB会「惜別の宴」」（2017年3月19日）の2度の閉寮記念OB同窓会が北溟寮で開催された後、2017年3月31日を以て北溟寮は閉寮し、1951（昭和26）年の創設以来66年に渡る歴史に終止符を打つこととなった。しかし2017年3月28日に落成した角間キャンパス内の学生宿舎が「北溟」と命名され²、「北溟」の名は後代に受け継がれていくことになった。OBとして望外の喜びであり、ご尽力いただいた各位に厚く御礼申し上げる次第である。これら北溟寮閉寮をめぐる一連の動きの中で多くの北溟OBの方々への御指導を賜ることとなったが、この度また貴重な資料と新たな知見を入手する機会に恵まれた。「北溟寮寮歌」作詞者の書簡とこれに同封の「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピー、及び「五誓寮逍遙歌」に関する新知見である。これについて報告し、考察する。

1. 「北溟寮寮歌」 作詞者書簡

1-1 影印と翻刻及び沿革

さて2017年8月8日、東京・銀座の銀座ライオン銀座四丁目店銀座クラシックホールにおいて四

高・金大OB会「北^{きた}の都^{みやこ}会」の第773回例会が開催され、席上筆者は「北溟寮歌の変遷—『ノルウェイの森』世代の若き群像」と題して講演する機会を賜った。その際、同席させていたただいた北溟寮OB・朝倉芳夫氏（1969〈昭和44〉年入寮、法文学部経済学科）より、「北溟寮寮歌」の作詞者である故・端名清^{はななきよし}氏の書簡並びに同封の「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピーのご寄贈を受けた。この書簡は1973（昭和48）年当時の北溟寮長宛のもので、消印は1973年9月12日付となっている。図1に封筒の表書きの影印を掲げる。なお、裏面は差出人の個人住所が記載されているため、プライバシー保護の観点から掲載は差し控えるが、「端名清」の署名がある。朝倉氏は在寮中にこれを当時の寮長から預かり、そのまま手元に保管なさっていた。北溟寮伝承寮歌に関する拙稿を通じて筆者の存在に着目され、この度の「北の都会」例会で筆者が講演することをお聞きになって、端名氏の書簡を寄贈されるべく出席なさったとのことであった。大変貴重な資料であり、私蔵するのではなく、筆者の別の研究が一段落し

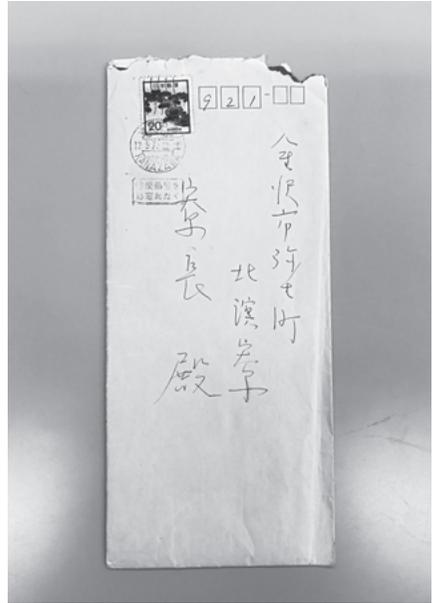


図1 端名清氏書簡封筒表

た段階でしかるべき施設に寄贈し、公共財とするのが適当と考えた。そこで2017年11月8日、端名氏夫人の笠間怜江氏に書簡並びに楽譜原稿コピーをご覧いただいた上でご承諾を賜り、同11月10日、封筒・端名清氏書簡・「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピーを金沢大学資料館に寄贈申し上げた。また朝倉氏からは同8月18日にメールで書簡の解説と、手紙を受けとられた当時の寮長の談話をいただいた。朝倉氏には同11月13日に端名氏書簡・楽譜原稿コピーを笠間氏了承のもと金沢大学資料館に寄贈した旨メール連絡し、同17日にお礼と寄贈の旨を当時の寮長にお伝えなさったことをメール連絡戴いた。朝倉芳夫氏、73年当時の北溟寮長、笠間怜江に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて本章では、まず1973年当時の北溟寮長宛・端名清氏書簡文面について取り上げる。端名清氏（1932～2011）の略歴は先述の拙稿「一考察」でも述べたが、改めて簡潔に記しておく。端名氏は石川県珠洲市出身、金沢市在住の水彩画家。婿養子になられて以後の本名は笠間清、筆名は端名姓で通された。1955（昭和30）年、金沢大学教育学部卒（第3回）。53（昭和28）年、北溟寮に在寮されていた2回生時に「北溟寮寮歌」を作詞、これが公募に当選して北溟寮の寮歌に制定される。中学・高校・北陸学院短大で教鞭を執られ、洋画家団体「一水会」会員、日展画

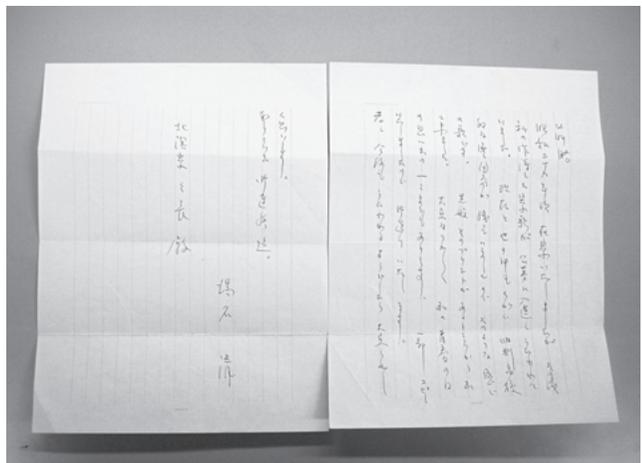


図2 北溟寮長宛端名清氏書簡文面

家として活躍、2008年に石川県文化功労者章受賞。作品は石川県立美術館、七尾美術館などに所蔵されている。図2が書簡文面の影印である。翻刻を次に掲げる。

前略

昭和二十九年頃 在寮いたしました が その頃
私の作詩した寮歌が 公募に入選し うたわれて
いました。 現在と 世の中もちが い 旧制高校
的な雰囲気が 残って いました ので そのような 感じ
の歌です。 先般 そのプリントが あるところから 出
て来ました。 大変なつかしく 私の青春の日
の思い出の 一こまでも あります。 一部 コピー
いたしましたので 御送り いたし ます。
若し 今後 も うたわれる ようでしたら 大変うれし
く 思います。
取り急ぎ 御連絡迄。

端名 清

北溟寮 々長 殿

本書簡は縦書き便箋二枚に渡って黒ペン書きで書かれており、10行目「大変うれし」で二枚目に移行している。日付は付けられていない。

書簡を受け取られた当時の寮長（匿名をご希望のためお名前は出さず、談話引用も間接的な形にさせていただく）は、先述した2017年8月18日の朝倉氏のメールに付された談話で、次のように述べていらっしやう。2017年現在で44年前のことになるため記憶もかなり薄れたが、手紙は一部の寮生にも見せ、端名氏にはお礼と寮の近況報告をしたためた手紙を送ったと思う。当時は端名氏も金沢在住でまだ40代ぐらいだと思うので、寮に来ていただいて話を伺う機会を設ければ良かった。個人的な意見だが、在寮当時「北溟寮寮歌」は、歌唱指導で教えられた寮歌の中では旧制高校の名残を残した他の曲に比べてバンカラ調子ではなく、比較的口ずさむことも少なかった感じであった。しかし、その後もこの歌が後輩たちに歌い継がれ、40数年を経て廃寮となった今でも、このように関心を持って取り上げてもらえることに、感慨ひとしおである。以上のような旨であった。

さて拙稿「一考察」でも述べたように、筆者が在寮した1986～92年頃は、四高生の末裔としての自負が北溟寮生の誇りの源泉であった。それ故、当時伝承されていた「金沢大学校歌」「四高寮歌（大正四年時習寮南寮寮歌「北の都」）」「南下軍の歌」「人を戀ふる歌」「北溟寮寮歌」「五誓寮逍遙歌」の6つの寮歌のうち最もよく歌われたのは「四高寮歌」であり、続いて四高の応援歌「南下軍の歌」であって、それらに比べると「北溟寮寮歌」は歌われることが少なかった。しかし、何と云っても「北溟寮」の名を冠するわが寮の寮歌であり、寮の行事ごとに歌われ、尊重されていた。また、原曲のテンポを大幅に引き伸ばし体をのけぞらせ大声を出す“バンカラ唱法”で歌われる筆者在寮時の寮歌の中でも、「北溟寮寮歌」は特に軽快なリズムと明朗なメロディーで歌われ、重々しい他の歌に比べて歌唱が体力的に楽であったのが特徴的であった。白山、北溟寮の建つ寺町台の弥生の地、犀川、内灘砂丘といった歌詞中のモチーフは、四高生の青春を描いた井上靖の詩「流星」や小

説『北の海』などを想起させ、四高の超然主義を思わせる高潔な詩句と各番末尾の「わが名輝け北溟寮」のリフレインが、北溟寮生としての誇りを一層湧き上がらせた。歌ううちに自分が、柔道に明け暮れた四高時代の井上に重ねられてくる、心躍る歌であった。

1-2 書簡文面考察 一旧制高校イメージの変遷一

さて本書簡は、「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピーを73年当時の北溟寮長に送付するに当たって、端名氏がこれに添えた挨拶状である。寮生だった20年前に作詞した寮歌の楽譜原稿を発見し、当時とはすっかり変わった現在の世相を思いつつも北溟寮への懐かしさ止みがたく、思わず現役の寮生に手紙をしたためた様がよく伝わってくる。朝倉氏から教示された当時の寮長の談話と併せて、1970年代における北溟OBと現役寮生の交流の一例を伝える貴重な資料である。ここには、世代を超えて寮生を繋ぐ寮歌の力が示される一方、寮歌から寮生が必ず想起する旧制高校のイメージの世代間ギャップも見られて興味深い。

すなわち、1949年の旧制高校廃止から間もない53年に、新制大学に色濃く残る旧制高校の雰囲気やを反映して作ったと端名氏が認識する「北溟寮寮歌」は、73年の寮生にとっては旧制高校の名残を残したバンカラ調の曲ではないと認識されていたのである。当時の寮長の言う「旧制高校の名残を残した他の曲」の中心となるのは、やはり金大の前身校・四高の歌である「四高寮歌」「南下軍の歌」であろうが、確かにこれらは軍歌にも近い典型的な寮歌調である。これに対し「北溟寮寮歌」はむしろ唱歌的で、出だしのところなど、1947年から50年にかけて放送されたNHKラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌に似ている感もある。他の寮歌に比べバンカラの泥臭さが希薄でスマートである。「四高寮歌」「南下軍の歌」が制作されたのは明治末期から大正初期であり（「四高寮歌」は1915〈大正4〉年、「南下軍の歌」は1906〈明治40〉年）、「北溟寮寮歌」が制作された53年とは40年から50年近くの時間差がある。その間、校風や学生気質が全く変化しないとは考えにくく、敗戦による社会的価値観の転換もあった。また元来エリート養成機関である旧制高校は、世の文化をリードする存在でもあったろうし、学生気質もバンカラ一辺倒というわけでは必ずしもなかったのではないか。その意味では「北溟寮寮歌」は、旧制高校末期の戦後初期の四高の雰囲気を反映した歌なのかも知れない。時代的にも軍歌的な曲調が避けられたのは自然である。

その点、旧制高校廃止から四半世紀近く経ち、その実態の記憶も薄らいだであろう73年の北溟寮では、四高は専ら「四高寮歌」「南下軍の歌」によってイメージされる“バンカラ”と認識されていたようである。この“バンカラ”とは体制側のトップを志向するエリートとは反対の、高度成長下の消費文化に抗う意味で敢えて標榜する“時代遅れ”のスタイルだと言えよう。73年と言えば、70年代後半に北溟寮生のバイブルとなる漫画『嗚呼!! 花の応援団』の連載が始まる75年まであと少しであり³、この漫画でもバンカラ応援団の泥臭い時代錯誤がスマートで合理的な消費文化へのアンチとして提示されていた。同じ75年にはやはり時代遅れのバンカラ気質を歌ったかまやつひろし「我が良き友よ」がヒットしている。これは、76年発表の河島英五「酒と泪と男と女」、79年発表のBORO「大阪で生まれた女」、86年発表の河島英五「時代おくれ」などととも筆者在寮中（1986～92）には寮生の間で愛唱されていた。これらはそれぞれ発表直後から北溟寮生に愛唱されていたのではないだろうか。いずれも不器用な愚直さによって時代に対抗する意味合いを持つ歌である。ただしここでの“時代遅れ”とは、いずれも人気漫画もしくは流行歌が起源であったことからわかる通り、当初は真の意味での時代遅れではなく、メインストリームに対するカウンターとして消費文明の一翼を担う、一つのトップモードだったと言える。

拙稿「一考察」では、“バンカラ唱法”化した寮歌歌唱に具現化する四高神話が80年代北溟寮生のアイデンティティの拠点だったことを指摘し、「補遺」ではその四高神話の起源を70年代における北溟寮生の意識変化と当時の若者文化の情勢に見てとったのだった。そこからすると、この「北溟寮寮歌」に対する端名氏と73年当時の北溟寮長との認識の違いは、“バンカラ”としての四高神話発生の兆候を示す例と見られる。当初それは70年代の若者消費文化の動向と軌を一にするものであったが、やがてそれは北溟寮において独自の進化を遂げて“バンカラ唱法”を生み、80年代北溟寮における固有の精神文化として、自治寮共同体の求心力の核となったと言えよう。ただそれはいわば“ガラパゴス化”への道でもあったわけで、86年の河島英五「時代おくれ」が作詞家・阿久悠の最後のヒット曲だった⁴ことに象徴されるように、北溟寮の“バンカラ”は80年代後半以降、真の意味で決定的に時代遅れとなりつつあったのだった。先述の拙稿「一考察」でも触れたように、筆者卒業後、寮歌はますますスローテンポ化していったのだが、それは次第に追いつめられていく北溟バンカラ精神が、寮歌唱法の体力的負荷を一層強化していくことによって必死に時代に抵抗し続けた軌跡だったとも見える。しかしそのために6曲全部を歌唱する体力的負担が大きくなりすぎたこともあって、2004年度から寮歌は「金沢大学校歌」「北溟寮寮歌」以外歌い継がれなくなってしまった⁵。四高生の末裔を自認していた筆者にとって、四高の歌が歌われなくなったということはまことにショッキングであったが、この頃までに金沢大学の前身校としての四高の存在は現役学生に意識されなくなり、80年代の四高神話も消滅してしまったのであろう。それにより強力な求心力を失った北溟寮は次第に共同体としての解体に向かい、医薬保健学域以外の全学角間地区転移が完了したことによる通学の不便さも相まって寮生数の減少を来し、閉寮を迎えたものと思われる。80年代の“バンカラ唱法”確立によって完成した北溟寮のバンカラ精神は、遂に時代に破れたのである。

しかし、“バンカラ唱法”確立から2017年の閉寮までの30年余りに渡り、北溟寮はその固有のバンカラ精神によって、時流から超然とした自治寮として独立自尊の歴史を歩いたのであった。その中で「北溟寮寮歌」は最後まで寮生に歌い継がれ、北溟寮の精神を伝えつつ、寮と命運を共にしたのである。今後も歌われると嬉しいとおっしゃった端名氏の思いが、制作以来朝倉氏や73年当時の寮長、筆者らを経て、北溟閉寮まで64年の長きに渡って受け継がれ、今なお北溟OBの胸に響いていることを思うと、筆者も感慨無量である。

2. 「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピー

2-1 影印と翻刻

次に「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピーを取り上げる。図3がその影印、図4が楽譜の翻刻である⁶。原稿は手書きで書かれており、下部に漢字平仮名交じり文で歌詞が縦書きされている。コピーの状態は良好とは言えず、所々かすれ・汚れがあるが、筆者自身歌い慣れていた歌であるので判読は可能である。ただし後述するように、歌詞・音階とも筆者世代が伝承していたものとは異なる部分があり、実際にこの歌を歌い継いだ北溟寮生の意識のあり方が反映されているようで興味深い。以下楽譜に付された歌詞翻刻をふりがな付きで掲げる。

北溟寮々歌

一、^{さいせつひか} 載^{はくさん}雪光る白山の
^さ 冴^みやけき^ね 高峯ぞ^{のぞみ}希望なれ
^{わか} 若^{じゆう}き自由の^{おたけ}雄叫びは
^{とき}時勢^{うしお}の潮に^はこだまして
^{じょうねつ}あゝ情熱^{たぎ}の滾る庭
^わ我が名輝^{ほくめいりよう}け北溟寮

二、^{せいうん}青雲^{きよ}渡^{ちようなん}き城南の
^{やよい}弥生^{がおか}ヶ丘^{ほこ}ぞ^は誇りなれ
^{かぜそう}風爽^{がく}々の^{まど}学窓^やや
^{せたく}世濁^{たくま}をよそに^ま琢磨^せせば
^{えいこう}あゝ栄光^{いらか}のさす^は甍
^わ我が名輝^{ほくめいりよう}け北溟寮

三、^と永遠^{しやうじやう}に^{さいが}蕭^{いは} 條^は犀川^のの
^{ゆか}床^みしき^づ流水^{つた}ぞ^は伝えなれ
^わ和^き気清朗^{せいらう}の^{よろこ}飲^びを
^つ盡^あきせぬ^い友愛^{むすぼ}に^は縮^れれば
^{すいえん}あゝ炊煙^{その}の^はゆらぐ^は園
^わ我が名輝^{ほくめいりよう}け北溟寮

四、^{ほくめい}あゝ北海^{かぜ}に^た嵐^ち立ちて
^{とうせいゆめ}涛声^{ゆめ}夢^をゆすぶれど
^{こくうん}黒雲^し凌^{つき}ぐ^{かけ}月光^をを
^{ざきゅう}砂丘^ふに^あ伏^おして^{とき}仰^どぐ時
^わ我が行く^ゆ方^{かた}ぞ^は映^はゆるかな
^わ我が行く^ゆ方^{かた}ぞ^は映^はゆるかな

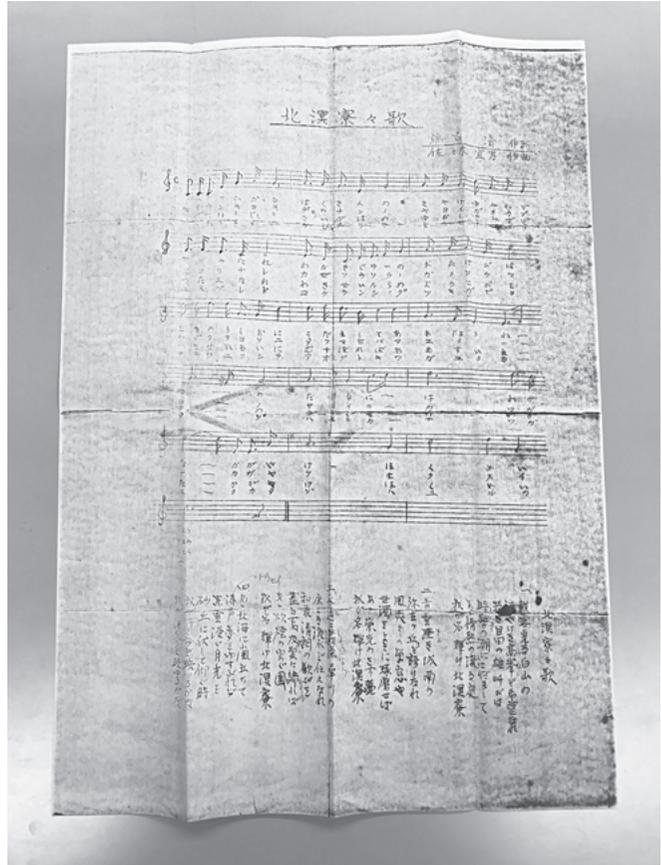


図3 「北溟寮々歌」楽譜原稿コピー

本楽譜は「北溟寮寮歌」の原型を示す貴重な資料である。寮歌は基本的に口承伝承されるものであり、毎年新歓祭寮歌指導時に配付されたしおり（筆者在寮時はボールペン原紙手書き印刷のもの）掲載の歌詞が原型を正確に伝えているとは必ずしも言えない。拙稿「一考察」では、「北溟寮寮歌」歌詞復元紹介に際し、北溟寮福祉部発行『北溟』第6号（1959年）及び7号（1960年）の扉に1番のみ掲載されている歌詞を定本として採用し、2番以下は團野の記憶を元に先輩OBのアドバイスも受けながら漢字表記を復元したのであった。このように従来その全体像の実態が不明であった「北溟寮寮歌」原型の全貌が、本資料によって明らかになったことは画期的である。

2-2 「北溟寮寮歌」原型版と伝承版の歌詞異同

次に拙稿「一考察」に掲げた「北溟寮寮歌」歌詞との異同を、「原型版（端名氏寄贈楽譜原稿コピー）→拙稿『一考察』掲載の改変版」の順で示し、番数ごとに確認していく。

1番。2行目「冴やけき高峯ぞ希望なれ→^{さや}爽けき^{みね}嶺ぞ希望なれ」、3行目「若き自由の雄叫びは→^{われら}我等自由の雄叫びは」、4行目「時勢の潮にこだまして→^{とき}時の潮に^{こだま}響して」、5行目「あゝ情熱の滾る庭→^{あゝ}嗚呼情熱の^{たぎ}漲る庭」（以下2番から3番中に出てくる「あゝ」は「一考察」版ではすべて「嗚呼」）、6行目「我が名輝け北溟寮→わが名輝け北溟寮」（以下2番から3番まで同じ）。

北溟寮々歌

端名清 / 佐々木宣男

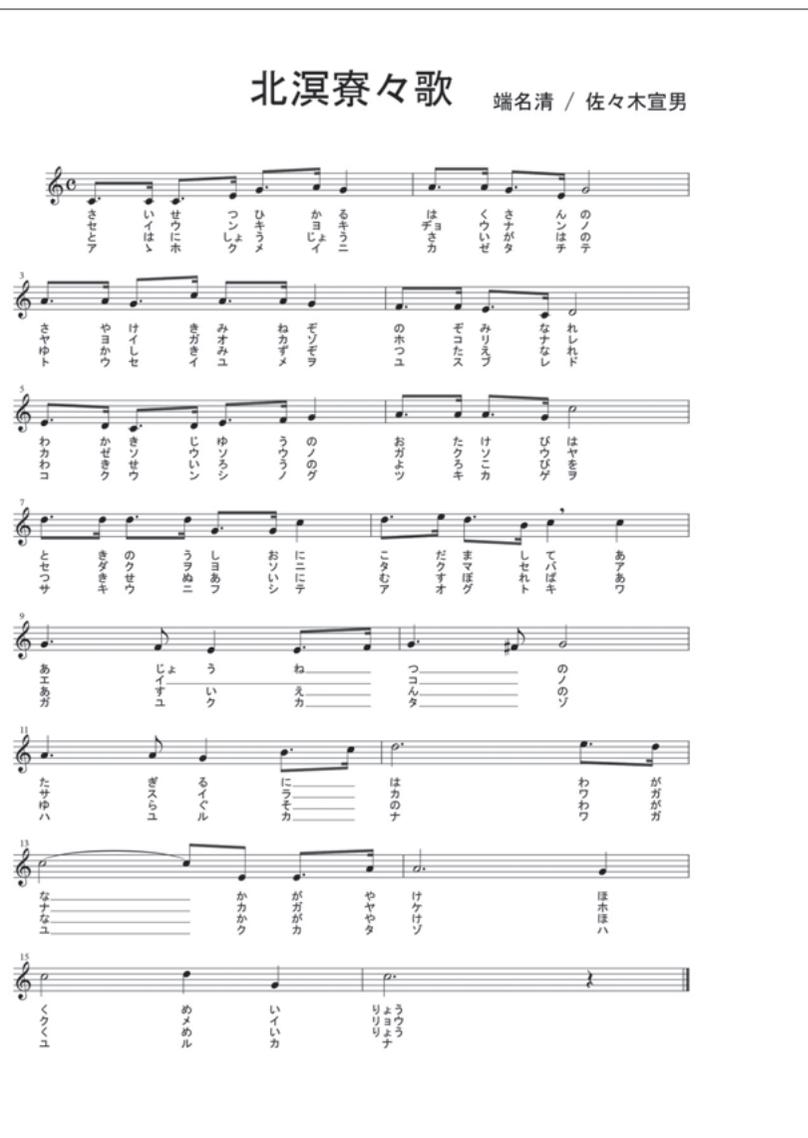


図4 北溟寮寮歌（原型版）楽譜原稿翻刻（船戸慶輔氏作成）

2番、1行目「青雲^{きよ}清き城南の⁷」→「風爽^{まな}々の学窓^や→風爽^{まな}々の学^び舎^や」、4行目「世濁^よをよそに琢磨^せば→世濁^よを余所^にに琢磨^せば」。

3番、1行目「永遠^{とこ}に蕭條^犀川の¹」→「永遠^{とこ}に清浄^犀川の」、2行目「床^しき流水^ぞ伝えなれ¹→ゆかしき水^ぞ伝えなれ」、3行目「和氣^晴朗^朗の歡^びを¹→和氣^晴朗^朗の喜^びを」、4行目「盡^きせぬ友愛^にに締^れば¹→盡^きせぬ愛^にに結^ぶれば」、5行目「あ^ゝ炊煙^のゆらぐ園¹→嗚呼^炊煙^の揺らぐ園」。

4番、1行目「あ^ゝ北海^に嵐^{かぜ}立ちて¹→嗚呼^北海^に風^{かぜ}立ちて」、2行目「涛声^夢をゆすぶれど¹→濤声^夢を揺すぶれば」、3行目「黒雲^凌ぐ月光^を→黒雲^凌ぐ月光^を」、5行目「我が行く方^ぞ映^ゆるかな¹→わが行く方^ぞ映^ゆるかな」、6行目「我が行く方^ぞ映^ゆるかな¹→わが名^輝け北^溟寮」。

ところで2017年11月29日より金沢大学資料館で開催された企画展示「バンカラ寮生類 金大寮史124年」(2018年3月16日まで)で、2001(平成13)年作成の「寮祭記念寮歌ボード」が展示されており、「北溟寮寮歌」歌詞も掲載されていた(2017年11月30日確認)。拙稿「一考察」版と比較して、旧字体と新字体、漢字書きと仮名書きなど意味に関わらない表記の異同の他、語の意味に関わる表記の異同が二カ所あった。一つは資料館展示版2番1行目「星雲^{せい}清き城南の」の「星雲」である。これは「一考察」版では「青雲^{せい}」と推定し、「清き」及び「世濁^よを余所^にに琢磨^せば」と呼応して、立身出世の俗悪さを伴いがちな「青雲の志」を純粋な自己向上の意志に転化する表現と解した。ここは原型版でも「青雲」であって、これが本来の形と断定できる。もう一つは資料館展示版3番1行目「永遠^{とこ}に蕭々^犀川の」の「蕭々」である。実は筆者も現役時に新歓祭りおり所収の歌詞が「蕭々」となっていた記憶があったが、この度展示版を見て、表記に関する記憶が正しかったことが判明した。ただここは「しょうじょう」と歌っていたところで、「蕭々」では「しょうしょう」と読むことになり、これを「しょうじょう」と読む例は一般には見当たらない。当て字のようにして「しょうじょう」と読んだものかとも思ったが、意味的にも「ものさびしいさま」となって前後の文脈から浮いてしまう。そこで拙稿「一考察」では、原型は清らかの意だったと推定して「清浄」を当てたのであった。しかしこの度原型版では「蕭條^{しょうじょう}」と表記されていたことが判明した。つまりこれは「蕭條^{しょうじょう}」であり(「條」は「条」に通じる)、「しめやかなさま」の意味がある。これなら後の「床^しき流水^ぞ」とも文脈上合致し、格調高く奥ゆかしい言葉として内容的にも寮歌にふさわしい。元来「蕭條^{しょうじょう}」とあったものが、後に「しょうじょう」という読みはそのまま「蕭々」と誤記されるようになったものだろう。従ってここは「蕭條^{しょうじょう}」が正しいと断定できる。以上の考察を踏まえ、以下「一考察」版の3番「清浄」を「蕭條^{しょうじょう}」と訂正したものを伝承版と称することにする。実際には資料館展示版の形で歌詞表記が伝承されたわけだが、寮歌が主として口伝で継承されていくこと、また『北溟』掲載によって1番の表記が確定した1959年の段階での2番以下の表記を示す資料が未発見であることから、諸資料を総合して意味的に矛盾のない伝承版の表記を暫定的に決定版としたい。

なお原型版3番4行目の「締^{むす}ばれば」は、ラ行下二段活用動詞「むすぼる」(「結ばれる」の意)の已然形「むすばれ」に接続助詞「ば」が付いた順接確定条件の表現であり、伝承版が「結ぶれば」としているのは文法的には破格である。これは「結ぶ」の已然形を下二段活用風に活用して「ば」を付けたものらしいが、「結ぶ」は四段活用動詞であり、順接確定条件の表現は「結べば」である。「結ぶる」という動詞があれば「結ぶれば」も成り立つが、そのような語は存在しない。文法的正確さよりも言葉の響きの良さを優先し、且つ自動詞「むすぼる」を「結ぶ」と他動詞化して意味を明確化することを企図した処置であろう。

2-3 原型版と伝承版との主題変化 一個人主義から集団主義へ—

さて原型版と伝承版とでは、表記・語形のみならず意味レベルでの語句の改変も見られ、これが歌総体の主題変化をもたらしていると言える。先述の書簡文面から見ても、端名氏自身が改変を加えたとは考えにくく、後代に歌い継がれる中で改変されたものであろう。先述の通り伝承版1番の歌詞は『北溟』第6・7号に明記されたもので、同誌第6号発刊の1959（昭和34）年の段階で1番の歌詞が改変されていたことは明白である。資料がないため断言は出来ないが、この1番改変の際に2番以下も同時に改変された可能性も考えられる。

最も目立つのは歌全体の結末部をなす4番末尾の改変である。原型版がここで「我が行く方ぞ映ゆるかな」を繰り返して締めくくり個人としての「我」の栄光を讃えるのに対し、伝承版は「わが名輝け北溟寮」と締めくくって各番最終行を統一し、「北溟寮」の名を「わが名」として引き受ける寮生らの集団の栄光を強調するのである。この改変によって歌総体の主題は、個人主義の称揚から集団主義の強調へと決定的に変化したと言えよう。

その他の細部においても、この主題変化は顕著である。1番3行目の「若き自由の雄叫びは」から「我等自由の雄叫びは」への改変は、そのわかりやすい例である。同4行目の「こだま」から「響」への変化も、敢えて当て字の度合いが強い表記を採用することで、集団の声が時代に響き渡っている印象を強調するものである。同5行目「あゝ情熱の滾る庭」の「滾る」は、伝承版では元来「みなぎる」と読む「漲る」になり、寮生個々に情熱が湧く様よりも、それらが漲る場としての北溟寮にスポットが当てられる。2番3行目では「学窓」が「学び舎」（資料館展示版では「学舎」）へ改変されている。両者とも学問を修める所という同じ意味だが、前者が一人窓辺に寄る寮生の姿を彷彿とさせるのに対し、後者は建物の存在が強調されており、これに包含される寮生集団を強くイメージさせる。また3番4行目の「あい」は原型版では「友愛」となっており、個人の意志に基づく自覚的な対等の関係を強く思わせるのに対し、伝承版では「愛」となっており、続く「嗚呼炊煙の揺らぐ園」と併せて家族愛にも似た同じ釜の飯を食う者どうしの自然発生的紐帯としてのニュアンスを強くしている。

原型版の個人主義には、「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造を目指す教育」と前文で唱う旧教育基本法の施行（1947（昭和22）年）など、「個人」「個性」を尊重する戦後初期の時代性とともに、作詞者・端名清氏の個性尊重の思想が反映しているように思われる。端名氏は2003（平成15）年から逝去の2011（平成23）年まで石川県一水会出品者協会会長を務められたが、その後任として会長に就任された江守マリ子氏は追悼文で「端名清先生は、日本人離れた風貌の持ち主で、人柄は明朗、いつも人を笑わせることが大好きな方でした」⁸と、その魅力的で個性豊かな人柄に言及している。また端名氏は「一水会金沢展」⁹と題する文章で、「一水会の出品作はすべてが具象絵画である。（中略）昭和三十年代衝動的に国内を襲った抽象表現主義にも動ずることなく、一水会は主義主張を守りつづけた有力な団体の一つであったと言えよう」として「写実を基本」とすることを強調しつつ、「どのように実物そっくりに対象を描いても、そこに描かれたものは画家によって取捨選択されたイメージであり、抽象作用が行われている」とした上で、「私たち一水会の仲間たちは、人物、静物、風景など自然の物体を借りて、自分の形と色を求め、写実を基本として、それを乗り越えるさまざまな試みを成果として、発表の日を迎えたのである」と述べている。つまり、「西洋絵画の伝統である写実の本道を守り、安易な会場芸術を非とし、技術を重んじ、高雅なる芸術を尊重すること」¹⁰という一水会創立の精神に則りつつ、写実を通じて個性を発揮するということが、端名氏の絵画思想

だったと言えよう。そしてこの思想の母体となる端名氏持ち前の強靱な個性が、「北溟寮寮歌」冒頭の1番2行目に端的に現れていると言えまいか。伝承版が「爽けき嶺ぞ希望なれ」とするこの箇所は、原型版では「冴やけき高峯ぞ希望なれ」と「さやけき」を「冴けき」としており、白山がより視覚的・写実的に表現されている。端名氏の思想に則れば、この白山と同時に立ち上がるのが、写実の精神を以てこれに対峙し「若き自由の雄叫び」を叫ぶ一つの個性ということになる。以下、白山、弥生ヶ丘、犀川、海と砂丘をモチーフとした北溟寮の写実を通じてその場に立つ個人の存在が浮き彫りにされ、最終的にその栄光が「我が行く方ぞ映ゆるかな」のリフレインで強調されるのである。

これに対し伝承版では、冒頭で白山が「爽けき」としてイメージ的・概念的・理念的に捉えられ、それが直ちに「自由の雄叫び」を発する「我等」北溟寮生集団に繋げられてその象徴とされる。これは、4番2行の「濤声夢を揺すぶれど」という原型版の逆接が、伝承版で「濤声夢を揺すぶれば」と順接化することに呼応している。すなわち原型版では、「濤声」が「夢」を脅かすが、雲の晴れ間から除く月影を仰ぐと「我が行く方」が「映ゆる」という形で、将来への不安を覚えつつ希望を抱く個人の内面のドラマが自然の様相の写実を通じて描かれる。これに対し伝承版では、「夢」を揺すぶる「濤声」に奮い立って「月光」を仰ぐと「我が行く方」が「映ゆる」という迷いなき勇猛さが、「わが名輝け北溟寮」と賞賛される。ここで「濤声」は主体と対立する対象とはならず、「自由の雄叫び」を「時の潮に響^{こだま}」させる「我等」北溟寮生集団と一体化してその象徴となる。このような1番と4番に縁取られることによって、2・3番の「弥生ヶ丘」の「学び舎」及び「犀川」も、北溟寮という集団の理念と情念の象徴として一貫されてくると言えよう。つまり、当初写実を通じた個人の抒情としてあった「北溟寮寮歌」は、伝承されるにつれて集団・共同体の理念と情念の象徴に改変されたのである。寮生によって愛唱される寮歌が、北溟寮という自治寮共同体の統合の象徴としていかに重要な役割を果たしたかについては拙稿「一考察」及び「補遺」で説いたが、そこからすれば「北溟寮寮歌」のこのような変化は自然なものだったと言えるのかも知れない。

2-4 「北溟寮寮歌」と内灘闘争

さて拙稿「一考察」では、1953年という制作年代と4番で「砂丘」が出てくることから、「北溟寮寮歌」と内灘闘争との関連の可能性について言及した。しかし原型版のこの個人主義的傾向からして、「北溟寮寮歌」が内灘闘争に直接触発されて出来たということはないようである。自身内灘闘争に参加し、後に同じ画家として端名氏と長らく親交のあった杉村雄二郎氏から2017年12月7日に電話でお話を伺ったが、端名氏から内灘闘争の話聞いたことはなく、「北溟寮寮歌」と内灘闘争との直接の関わりは考えにくいとのことであった。同日に夫人の笠間怜江氏にも改めてお電話したが、笠間氏も端名氏から内灘闘争について何も聞いたことはなく、直接的な関係はないだろうとのことだった。原型版では4番の「北海」を「ほくめい」と読ませており、この当て字によって砂丘・濤声・月光という自然物の写実が北溟寮生活における個人の心情の表現となるが、これも内灘闘争の渦中にある北溟寮生の心境を直接意味するものではなく、困難を乗り越え精進しようという、寮生活に臨む者の一般的な決意を歌ったものと考えられるべきなのであろう。

ただ笠間氏は当時金沢でも話題になっていた内灘闘争が時代の風潮として歌詞に影響したことはあるだろうとも述べられ、杉村氏も2018年1月6日の聞き取りでは、多くの金大生が内灘闘争に参加した学内の雰囲気や歌詞に反映したことは考えられるとおっしゃっていた。さらに「濤声夢を揺すぶれど」から「濤声夢を揺すぶれば」へ、すなわち原型版の個人主義に基づく写実的な逆接表現から伝承版の集団主義に基づく象徴的な順接表現へという4番の歌詞の改変にも、内灘闘争の影響

が見て取られるように思われる。と言うのは、『ノリソダ騒動記』等の記録文学で著名な作家・杉浦明平のルポ「〈大学の庭49〉 金沢大学 荒海の内側に」（『朝日ジャーナル』1964〈昭和39〉年2月9日号）の存在があるからである。当時の金沢大学をレポートしたこの文章を、杉浦は次のように締めくくる。

……理科系にくらべて文科系はいかにもひよわにみえる。といっても、教授陣のことではなくて、学生がおだやかで古雅な金沢市からとりいれている気分のことである。だが、このおとなしい学生たちも、内灘問題では、あのように煮えたぎったではないか。あの興奮こそ、文科系学生の真理探究欲を燃やす火であろう。

わたしは金沢を去るに当って、金沢大学生から多数の市民までを燃えあがらせたその内灘へ行ってみた。一点の緑色もなく、ただ灰褐色の砂丘には、灰色に枯れたやせた雑木が吹雪の中でじっと立っているばかり。灰青色の日本海は荒れて沖のほうから幾重にも白波がくずれて、しぶきまじりの吹雪を吹きつけてきた。海岸にはくぼみのほかには雪もたまらない。すさまじい寒さと荒れようだった。金沢市の古ぼけて死にかかったおとなしさのすぐ裏に、このように息もできぬ荒荒しく冷たい荒涼たる世界があるのだ。

基地であろうとなかろうと、金沢をとりまくこのような内灘的世界をくぐることだけが、金沢大学、とくに文科系学生のよみがえる方向ではなかろうか。金沢大学は、今でも内灘を忘れてはならないのである。

ここには、かつて金大生も燃えた内灘闘争の記憶を宿す砂丘と濤声を、古都金沢の停滞に染められた現在の金沢大学を覚醒させる反骨精神の象徴と位置付け、内灘を思い出せと金大を叱咤激励する構図が見られる。この構図は拙稿「一考察」及び「補遺」でも言及した金大北斗寮機関誌『北斗』第3号（1967〈昭和42〉年4月）掲載の嶋谷潤氏（当時北斗寮生）の論文「四高への郷愁を断絶せよ」にも「あの内灘闘争に立ち上った先輩達の、そして安保の全学連の意気はどこに消えたのか。内灘砂丘に囲まれた内部加賀平野は温和な古都である。／しかし外海はシベリヤから吹きつける寒風ですさまじく荒れているぞ。／冬の日本海の厳しさに我々を鍛えようではないか」という形で現れ、1960年代に一般化していたことをうかがわせる。この反骨の象徴として人々に奮起を促す内灘のイメージこそ、内灘闘争の遺産であろう。伝承版「北溟寮寮歌」における、内灘の砂丘にとどろく濤声を、讃えるべき北溟寮生集団の象徴とする「揺すぶれば」への改変は、この構図に沿うものである。その意味で伝承版「北溟寮寮歌」は、内灘闘争の記憶を無意識裡に包含していることになる。

ところで拙稿「一考察」でも言及した通り、「北溟寮寮歌」におけるこの内灘のイメージは、筆者が在寮した80年代後半には専ら井上靖などのイメージから連想される神話化されたパンカラ四高生を想起させるものだった。そこには、北溟寮伝承寮歌の一つである四高応援歌「南下軍の歌」2番「嵐狂へば雪降れば いよ、燃えたつ意気の火に 血は逆捲きて溢れきて 陣鼓響きて北海の『健児髀肉を嘆ぜしが』 遂に南下の時到来」との関連も明らかに指摘できる。一方杉浦民平もまた先の金大ルポで「中野重治の小説でもよんで四高時代をふりかえってみればいい。金沢大学生たちが、今でも新たに制定された大学校歌を歌わず、旧四高寮歌を高吟して歩いているとしたら、なおさらである。旧制高校生活のもつ若干の反世俗主義・非優等生主義のロマンチズムにたいして共感をおぼえているのだから、文科系は、こういうロマンチズムなしではどんな美しい城内も空漠たるものになるだろう」と述べ、金大のあるべき姿のイメージとして内灘とともに四高を挙げてい

た。対するに先の鳴谷論文は冒頭で「戦後二十二年、新制大学発足以来十八年の歳月が流れた今もなお大学校歌を歌う前に旧制高校寮歌を歌う土地があるとすればまことに因習深い町であろう。それが金沢なのである」と述べ、表題通り金大の四高イメージからの脱却を主張する。ここでは四高が金沢と同じく克服すべき反動として内灘に対立させられており、四高を内灘と同じ反骨の理想と位置付ける杉浦ルポと対照をなしている。四高の実体が失われて時間が経過した1960年代に、そのイメージが反骨と反動の間で揺れている様が見て取られるが、「北溟寮寮歌」において四高は最終的に内灘のイメージに回収される形で反骨の象徴となったことになる。それは杉浦ルポの論理と方向性を同じくするものだった。「北溟寮寮歌」における内灘闘争を介したこの四高イメージ止揚の過程は、先述した端名氏と73年当時の寮長との四高イメージのギャップ、及びそこに兆す北溟四高神話発生に見合うことと言えよう。

2-5 原型版と伝承版との曲調変化

さて「北溟寮寮歌」の原型版と伝承版とは曲調にも変化が見られる。図5は筆者在寮時の曲調を筆者が楽譜に書き起こしたものである（船戸慶輔氏翻刻）。もともと85BPMほどのテンポで歌う曲と思われるが、筆者在寮の頃は35BPMほどのゆっくりしたテンポで腰を入れ体をのけぞらせて大声を出す“バンカラ唱法”で斉唱した。楽譜からもわかる通り四拍子の曲であるが、筆者在寮時には“バンカラ唱法”で歌いやすくするためか、各番冒頭から4行目の歌詞までは三拍子で歌い、5行目の「嗚呼」（4番は「わが」）以下を四拍子で歌った。2012年4月11日にYouTubeに投稿された当時の現役北溟寮生による「北溟寮寮歌」歌唱動画¹¹では、テンポが11BPMほどとさらに遅くなっているが、音階と拍子は筆者在寮時と同じであった（2017年12月28日確認）。

原型版を作曲した佐々木宣男氏¹²については『石川県大百科事典』¹²に記載がある。これによると、氏は1908（明治41）年生、88（昭和63）年没の音楽教育者。岩手県宮古市生まれ。東京音楽学校を卒業し、京都府立宮津高女、金沢第一高女、金沢高師付属中を経て、1949（昭和24）年に新制金沢大学教育学部助教授に就任。同年金沢大学フィルハーモニー管弦楽団を創設し、56（昭和31）年まで常任指揮者を務め指導育成に当たった。『学生のための和声学』を出版、和声学、作曲法で県内の指導的役割を果たし、多くの校歌・団体歌を作曲、1962（昭和37）年に愛媛大学教授へ転任した、とのことである。『石川県大百科事典』では『学生のための和声学』の沿革が記されていないが、筆書はこれを所有しており、安藤芳亮氏との共著で金沢市中村町の吉田次作商店から1950（昭和25）年に出版されている。国会図書館蔵書目録にも収録されていない稀覯本である。

専門家が作曲したため当然ではあろうが、「北溟寮寮歌」原型版と伝承版とを比較してみると、原型版のほうに格調の高さを感じる。経過音や補助音を伴う繊細な長調の調べに所々短調的な音階が挿入され、全体として個人の内面を情感豊かに表現する抒情歌的な印象がある。その分音階は複雑で歌うのが難しく、バンカラを標榜する猛者が集う北溟寮の寮歌としてはやや柔弱な感じを受ける。これに対して伝承版は、経過音や補助音、短調的な音階の挿入がなくなり、メロディーが単純化されている。その分歌いやすく明朗で勇壮な曲調となり、多様多数の寮生が一斉に大声で歌い士気を高めるのに適している。内面の生じる余地がないその開放的なメロディーは、プライベート空間のない男子寮生活を彷彿とさせ、自他の境界を取り払って自治の基盤となる寮生どうしの固い絆を育む力を感じさせる。すなわち当初ロマンチックなメロディーを有した「北溟寮寮歌」は、男子自治寮の寮歌にふさわしい純朴で力強いメロディーに改変されて歌い継がれたのだった。曲調のレベルにおいても、原型版の個人主義から伝承版の集団主義へという変化は生じていたことになるだろう。

北溟寮寮歌 伝承版



Figure 5 shows the musical score for the traditional version of 'Hokuto Ryōka'. The score is written on a single staff in treble clef with a common time signature (C). It consists of 15 measures of music with Japanese lyrics written below the notes. The lyrics are: させとア いわア せうにホツ つし ひキウカ かヨシヨイ るキヨニ はヨシカ くウイセ さ子がタ んんわチ のノのチ さヤゆト やヨカウ ケイシセ キカキイ ミオミユ ネカズメ ゴンゴロ のホツユ ゴコナス ミリエツ ナナナレ うれレバ わかわコ れせきク らソセウ ジウイン ユソラシ うウラノ のノのツ おマナガッ たナラ ケヒニコ ビヤビツ はヤヲ とせつサ キダキキュ のクセウ ヲヒニ うヨアツ シソいシ おニテ に こたむア だクサオ ママボク しせれト てハバキ あアアウ あアアガ じよエユ ういイウ ねコ丸カ つウんタ のノのソ たサゆハ ギスラユ るイクル にラセカ わかのナ わわわわ がががが なななナ かかかカ がががガ やややヤ ケケケケ 塚本塚本 くくくク めめめメ いいイイ リヨウリヨウ リヨウリヨウ

図5 「北溟寮寮歌」伝承版楽譜（團野光晴作成、船戸慶輔氏翻刻）

3. 「五誓寮逍遙歌」正調のテンポについて

最後に北溟寮伝承寮歌の一つである「五誓寮逍遙歌」に関する新知見について紹介する。拙稿「一考察」「補遺」でも述べたように、この曲は金沢高等師範学校の「金沢高師逍遙歌（I）」として終戦直後に作られた。後に金沢高師の寮の名を冠した「五誓寮逍遙歌」として、五誓寮の後身である金沢大学北斗寮で主に歌い継がれ、1967（昭和42）年6月の北斗寮閉寮後は北溟寮が引き継いだ。拙稿「補遺」では、2016年11月5日に北溟寮で開催された閉寮記念同窓会席上で1970年代後半在寮世代の一人が「五誓寮逍遙歌」を披露され、そのテンポが筆者世代とほぼ同じ35BPMほどであったので¹³これを正調と見なし、他の寮歌が軒並み正調から大幅にスローテンポになっていった中で、「五誓寮逍遙歌」のみはもともとテンポの遅い曲だったようであると述べた。

さて2017年8月8日に開催された「北の都会」第773回例会では、拙稿でもしばしば引かせていただいている論文「四高への郷愁を断絶せよ」を執筆された鳴谷潤氏にお目にかかる僥倖に恵まれ、大変親切に遇していただいた。鳴谷氏は北斗寮のご出身（1965〈昭和40〉年4月の新入寮から67年6月の北斗寮閉寮まで在寮。66年11月の最後の北斗寮祭時の寮長）でいらっしやることもあり、当日居合わせた筆者世代4名（筆者の1年先輩1名、2年後輩2名及び筆者）が鳴谷氏と共に「五誓寮逍遙歌」1番を歌って会場に披露することとなった。筆者世代は例の“バンカラ唱法”で大音声を取り上げスローテンポで歌い始めたが、気がつくやうに鳴谷氏は歌っていらっしやらず、歌が終わったところで一言「全然違う、美しくない、悲しくなる」と発言された。「五誓寮逍遙歌」のみは原型がそのまま伝承されていたものと認識していた筆者は意外の念に打たれたが、直後に鳴谷氏がお一人で「五誓寮逍遙歌」を披露された。これを聞くとおよそ70BPMほどのテンポで、印象としては他の寮歌の正調とほぼ同じいわゆる普通の歌い方であった。鳴谷氏の歌唱によって「五誓寮逍遙歌」正調のテンポが明らかになり、大変貴重な機会であった。

拙稿「補遺」でも述べた通り、70年代後半在寮世代の小原裕一^{こはら}氏の証言によると、小原氏世代の北溟寮伝承寮歌6曲の歌唱テンポは、「五誓寮逍遙歌」のみは筆者世代とほぼ同じスローテンポ（27～35BPM程度）、「南下軍の歌」は85BPM程の正調よりもやや遅い67BPM程（筆者世代では38BPM程）、「北溟寮寮歌」は数値測定を行っていないが筆者世代よりも速く、「金沢大学校歌」「四高寮歌」「人を戀ふる歌」はほぼ正調通り（85BPMほど）の普通の歌い方であった。そして80年入寮の高屋秀行氏らが新入寮時に指導された寮歌は既に全て“バンカラ唱法”化していたのだった。この度鳴谷氏により、「五誓寮逍遙歌」も元来いわゆる正調で歌われていたことが判明した。ここからすると、小原氏世代の北溟寮伝承寮歌歌唱テンポは過渡的様相を呈していることとなり、1970年代後半にまず「五誓寮逍遙歌」からスローテンポ化が始まり、それに倣う形で他の寮歌もスローテンポ化して、70年代末頃に全体の“バンカラ唱法”化が完成したということになるようである。

ところで、“バンカラ唱法”による筆者世代の「五誓寮逍遙歌」に対する鳴谷氏の厳しい批評は、伝統の継承における世代間の葛藤ということを思わせる。本稿で主に取り上げた「北溟寮寮歌」についても、「若し今後もうたわれるようでしたら大変うれしく思います」という作詞者・端名清氏の思いは、半ば成就され、半ば裏切られているとも言える。端名氏も、そして作曲者の佐々木宣男氏もまた筆者世代の「北溟寮寮歌」をお聞きになれば、「美しくない」とおっしゃるのかも知れない。人を繋ぐ寮歌の力が世代を超えるということは、閉寮記念同窓会開催など北溟寮閉寮をめぐる一連のOBの動向と、これに並行する形となった北溟寮伝承寮歌研究の中に身を置くことで実感したと

ころだが、反面、各々の胸襟を開かせる寮歌を通じて、寮歌に寄せる思いの違いも殊に世代間で露わになった。しかし、寮歌を通じた深い信頼関係における緊張関係こそ、人生の道場たる自治寮における切磋琢磨の前提であったと言えよう。本研究における様々な方々との触れ合いの中で、自分が鍛え上げられていくことが強く感じられたのである。御指導いただいた皆様に改めて御礼申し上げますとともに、鍛錬の場を提供してくれた北溟寮と寮歌に、感謝の意を表したい。

注

- 1 金沢大学人文学類一年「地域概論」2016年度前期前半第3回（2016年4月28日）及び同2017年度前期前半第3回（2017年4月27日）。また講演「北溟寮歌の変遷—『ノルウェイの森』世代の若き群像」（四高・金大OB会「北の都会」第773回例会、2017年8月8日、於東京・銀座ライオン銀座四丁目店銀座クラシックホール）。
- 2 『北國新聞』2017年3月29日付に報じられた。
- 3 これについては拙稿「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察・補遺」（『金沢大学国語国文』第42号、2017年3月。本文中に先述）でも言及した。
- 4 高澤秀次氏の説による。高澤秀次『ヒットメーカーの寿命 阿久悠に見る可能性と限界』（東洋経済新報社2009）214～219頁。
- 5 2017年11月28日に中川絃氏（2002年北溟寮入寮、理学部化学科）から電話で伺った。中川氏によると、これは2003年12月か04年1月の寮生大会で決定され、04年4月の新歓祭から「金沢大学校歌」「北溟寮寮歌」の2曲のみを新入生に指導するようになったとのことである。寮歌のテンポが遅くなりすぎて6曲全部を歌うことが体力的にきついというのが主な理由であった。またこの頃寮生数が200人を下回るようになり（筆者在寮時の1986年から92年においては300名前後）、寮歌歌唱の負担を軽減してこれ以上寮生数を減らさないようにする狙いもあったということである。
- 6 「北溟寮寮歌」原型版（図4）及び伝承版（図5）の楽譜翻刻には石川工業高等専門学校建築学科准教授・船戸慶輔氏の協力を得た。船戸氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げる。なお「北溟寮寮歌」楽譜原稿コピーの影印及び翻刻の論文への掲載については、作詞者の端名清氏の夫人である笠間怜江氏には許可をいただいたが、作曲者の佐々木宣男氏の関係の方には連絡がつかなかった。とりあえず引用と解釈してここに掲載するものであるが、心当たりのある方がいらっしゃったならば誠意を持って対応させていただくので一報下さりたく、この場を借りてお願い申し上げます。
- 7 ここでは原型版の「きよき」に「洩き」の字を筆者の判断で当てたが、実際の原型版の歌詞ではさんずいかにすいになっているようにも見え、またつくりの下部の「又」が「王」のようになっている。このような字は一般的な辞書には見当たらず、端名氏の創作した字である可能性が高い。なお楽譜記載の片仮名書き歌詞から、読みは「きよき」であることに間違いはない。
- 8 『北國新聞』2011年4月22日。『一水会金沢展 半世紀のあゆみ』（石川県一水会出品者協会、2011年）所収の孫引き。なお本書は杉村雄二郎氏（一水会会員）より提供を受けた。この他杉村氏及び笠間怜江氏には、端名氏の人物像について多くのご教示をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。
- 9 『北國新聞』1995年11月2日夕刊。『一水会金沢展 半世紀の歩み』（前掲注8）所収の孫引き。

- 10 『一水会金沢展 半世紀のあゆみ』(前掲注8) 10頁。
- 11 <https://www.youtube.com/watch?v=tzFfjIYBao>
- 12 北國新聞社刊、1993年。
- 13 正確には筆者世代の「五警察逍遙歌」のテンポはこれよりもやや遅く、27BPMほどが平均的なところと思われる。